

FREE

百貨店のおもてなしを支えるプロフェッショナルたち

日本百貨店協会

ヒト・コト・モノ語り

～しあわせの百貨店 ハートウォーミング・ストーリー～



Episode 13

井筒屋小倉店

貫 由美子さん

～オーダーメイドの
婦人服デザイナー～

「舶来の生地的美しさに 魅せられて——」

ほんとうは1年で辞めるつもりだった。しかし、振り返ってみたら、彼女の後ろには長い長い道が刻まれていた。洋裁好きだった一人の少女は、いまオーダーサロンの女主人として、百貨店になくてはならない存在になった。彼女が魅せられたオーダーメイドの仕事とは？

楽しみに仕上がりを待つ お客様の想いに応えたい

JR小倉駅からほど近い井筒屋小倉店。今年で創業81年を迎える九州きつての老舗百貨店だ。本館3階、婦人服売り場にある「オーダーサロン」で出迎えてくれたのは、貫由美子さん。貫さんは、入社以来、オーダーメイドの婦人服デザイナーとして、一点ものの洋服を作り続けている。「気づけばもう、入社してこの10

月で丸36年になります」

その言葉を聞いて、思わず年数を聞き返した。

「はい、24歳で入社して、36年で」

可憐な花模様をあしらったツイードがよく似合う貫さんは、少女のようにほんのり頬を染めて、不躰な質問にも柔らかな笑顔で答えてくれた。もちろんこのツイードも貫さんのデザインによる、世界で二着だけの洋服だ。現在、貫さんは、このオーダーサ



本館と新館の間にあるクロスロード。小倉城を臨む憩いの場所だ。

ロンをただ一人で担当している。オーダーメイドの洋服は、受注から商品のお渡しまで、早くても1カ月ほどはかかる。一般には馴染みの薄いオーダーメイドの工程を貫さんに説明してもらった。「たとえば、ワンピースを作りたいとお客様が見えになった場合、まずはどんなスタイルが好みか、どんな生地がいいかをうかがいながら、その場でデザイン画を描いていきます。その後、採寸



お客様と落ち着いて話ができる、ゆったりとした雰囲気のサロン。

をし、専門の方にデザイン画をもとに型紙を起こしていただきます。それから、裁断ですね。その後お客様にご来店いただいて、仮縫い。それが済むと本縫いとなり、ようやくお客様の手に渡ることになります」

貫さんは簡単に説明してくれましたが、この工程、そうたやすいことではない。最初に起こすデザイン画の重要度はいうまでもなく、型紙が上がってきたときには、サイ

「サイズがぴったりで着心地がいい」
お客様の言葉で苦労も吹き飛びます。



ズは正しいか、デザインのイメージ通りにラインが入っているかどうか、こと細かく点検するという。また、裁断の際、貫さん自身が鉸はきみを入れることはないが、生地の手入れをどの部分にもつてくるかなどを決定する。裁ち合わせの指示をするのも重要な仕事だ。一着が出来上がるまでには、さまざまな工程と多くの人々の手をたどるが、そのすべてを把握し、指示をするのは、貫さん一人。

「仮縫いまで進んだら、再びお客様にサロンに足を運んでいただきます。ここで確認するのはサイズだけではありません。襟が詰まりすぎとか、もつと詰めてほしいとか、お客様が思い描いていたイメージや着心地と違う場合は、細かくご相談してお直しをします」と貫さん。

そうしてようやく本縫いに進むが、ここでも貫さんは手を抜かない。

「仮縫いのフィッティングの後、補正の指示をして、縫ってもらう方を呼んで直接お話ししながら、

お洋服を渡します。この時にはボタンや裏地などの附属品も揃えてお渡しします。直接会ってきた人と説明をすることにこだわっています」



完成した服がお客様の身体にスッと収まったときの安堵感は格別だそう。

楽しみにされていたお洋服に間違いがあるなんて許されませんか。正確に意図が伝わらず、『こうかな?』と疑問を抱えたまま縫うなんて絶対にダメなんです。お客

貫さんは、表情を引き締め、そう話す。いつもお針子さんが出来上がりを納品する際には、直接サロンに来てもらい、貫さんがすべて点検し終わるまで同席してもらおうそう。厳しいプロの顔がのぞいた瞬間だった。

苦労が吹き飛ぶ お客様の言葉

たった二人でオーダーサロンを切り盛りしている貫さんの毎日
は多忙のひと言に尽きる。1年に必ず1〜2枚オーダーをするお客様、シーズンごとにオーダーをするお客様などを含め、40〜50人の顧客の受注をこなし、その合間には以前に作った洋服のお直し依頼なども入る。そんな目の回るような日々を支えてきたのは、オーダーメイドの仕事ならではの醍醐味だった。

毎回、必ず対面でやりとりをするのは、貫さんのお客様に対する深い想いからだ。『お客様には1ヵ月以上もお待ちいただいています。それなのに、

「仕立て上がったお洋服に袖を通されたとき、『自分にあったサイズは気持ちいい』とか、『着いて安心』なんて言葉をお客様か

らいただと、苦労なんて一瞬で吹き飛びます」

顧客のなかには、30年以上もの付き合いになる方もいる。

「当時は、娘さんが小学校2年生か3年生くらいだったんです。でも、もうその娘さんも40代(笑)。いまでは、娘さんはもちろん、その息子さんのお嫁さんのお洋服も



さまざまな服飾雑誌を見ながら、お客様と相談してデザインを決める。



選んだ生地が似合っているか、実際にお客様に生地を当てて確認。

仕立てさせていただいてるんですよ」

貫さんは嬉しそうに笑う。そうした常連のお客様がこれまでに仕立ててきた服は、ご本人よりも覚えていそう。

「受注から仮縫い、お渡しと少なくとも3回はお客様とお目にかかり、その合間には、どんなデザインにしようか? どんな素材がいいか? と悩むので、覚えてい

るんでしょうね。でも最近は忘れれちゃうこともあるかな(笑)」
そう言うてはにかむが、貫さんは過去の記録を見ることはほとんどない。すべてその頭に入っているというから驚きだ。

ウエディングドレスも仕立てる信頼の腕

36年間という長い歲月、井筒屋で過ごしてきた貫さん。その入社



フィッティングルームで採寸。ゆとりのある広さがお客様にも好評だ。

えが返ってきた。

「百貨店のオーダーのお仕事なんて絶対に無理と思ってました」

貫さんは高校卒業後、小倉の洋裁学校で1年、さらにより専門的な技術を学ぶため、直方ののすみれ服装学院で5年間、基礎からプロとして通用する技術までを徹底的に学んだ。

「家庭で楽しむ洋裁ではなく、仕事としての洋裁をみっちり仕込まれました。院長先生が、これらの女性は手に職をつけて、社会で活躍していかなければならないという方針だったんです」

卒業後、自分のペースに合わせて

少しずつ仕事を受け始めた頃、学校から「井筒屋のオーダーサロンで働いてみない?」と紹介を受けた。「先生の顔を潰すわけにもいかないの、面接には行ってお断りするつもりでいました。でもその席で『入ってくれるよね』と言われ、断れない状況になってしまった(笑)。1年でやめようと思つて、入社したんです。でも、舶来の生地の素晴らしさに魅せられてしまつて。それに自分の発想にはないデザインが、当時何人かいらした先輩デザイナーの皆さんからどんどん出てくるんですよ。とても刺激を受けました」

外商担当者と初めて外販に出て、注文がとれずしょんぼりして帰ってきた大雪の日、初めて店頭で受注をし、ドキドキしたあの日……。貫さんからは、そうした日々が、日付まで正確に鮮やかに飛び出す。それこそが一日一日、ただひたすら真剣にお客様に向き合ってきた証にはかならない。

「お客様の数だけ思い出はありますが、なかでもウエディングド



マネージャーの兼田誠治さん(左)と。「柔らかな物腰と、仕事への厳しい眼差しが貫さんの魅力です」

レスのお仕立てをさせていただいたことは思い出深いですね」
夢見るような表情で貫さんは教えてくれた。

「ご主人の趣味が音楽で、奥様は歌を歌われる方でした。コンサート形式の結婚式をされるということで、歌ったり踊ったりできるウエディングドレスをとのご注文だったんです。また結婚式の後もコンサートなどで着たい、残しておけるドレスにしたいとおっしゃられて、力が入りました」

貫さんはその結婚式にも呼ば

れ、ドレスは、新郎新婦をはじめ、参列者からも絶賛されたという。「当日は、踊っていらつしやる時に裾が引つかからないか、歌われるときに苦しうじゃないか、気が気じゃありませんでした。でもとても素敵な結婚式でした」
最後に貫さんに、洋裁をしたと思ったきかけを聞いてみた。「姉の影響で縫い物が好きになつてチクチクやっていた頃、母が握り鉋(和鉋)をくれたんです。それがすごくよく切れて！それで作ったものが家庭科の先生に褒められたりと、とても単純な理由なんです。あつ、でも、小学校6年生のときに、バービー人形が発売されて、それもすごい素敵だと思って、ソックスを切つて、オファートルのような洋服を作つて遊んでいました。そのバービー人形はローウエスタのワンピースを着ていて、ベルトなんかとてもお洒落で。母にこういうの

井筒屋 小倉店



営業時間:10:00-19:00

〒802-8511 北九州市小倉北区船場町1-1

TEL:093-522-3111(代表)

<http://www.izutsuya.co.jp/storelist/kokura/>

昭和10年、株式会社井筒屋百貨店が設立。翌年には現在の本店(小倉店)にあたる井筒屋を開店させた。その後、八幡店(現在の黒崎店)も続いて開店。北九州市内で唯一の百貨店として、地元の人々に愛されている。

作つて！なんてセガんだりして」
瞳をキラキラさせてそう語る彼女を、サロンの奥から見つめるのは、当のバービー人形だ。「これは当時のものとは違います。が、数年前にまた欲しくなつて買ってしまったんです」
1年のつもりが36年。朗らかな笑顔の向こうに、初めて握り鉋を手にしたときの、喜びにあふれる少女の面影を見た。



子どもの頃に夢中になったのと同じ顔のバービーを最近購入。眺めていると今でもワクワクするそう。

A woman with short dark hair is standing in a clothing store, smiling. She is wearing a dark grey suit with a small white and pink floral pattern. The suit has a Peter Pan collar and white piping along the edges. She is also wearing a matching knee-length skirt and black Mary Jane shoes. Her hands are clasped in front of her. In the background, there are shelves with various fabrics and a red armchair.

Profile

本館グループ 婦人第1担当。
すみれ服装学院卒業後、1980
年に株式会社井筒屋に入社。以
来、婦人服オーダーサロンでオー
ダーメイドの洋服を作り続けてい
るデザイナー。生地やデザインの
提案から、採寸、仮縫い、補正、
納品などのすべてを担当する。

オーダーメイドならではの 温もりあふれる丁寧な仕事

ご注文をお聞きし、細部までこだわって
仕上げるのがオーダーメイド。
いかにもオーダーメイドらしい雰囲気が出る、
お客様に人気の工夫をご紹介します。



● オーダーならではの「ピン出し」

襟や袖口をふちどるように施された加工。生地と同じ色でシックにまとめたり、濃い色で引き締めたりと、さまざまな表情を出すことができる。



● ボタンで遊ぶ

ボタン選びはオーダーの楽しみのひとつ。このボタンは服地の質感にあわせて、透け感のある涼しげなものを選んだ。



● 裏地のお洒落

見えてもお洒落のように裏地にもこだわる。この洋服をオーダーされたお客様は、なんと90歳。着脱がしやすいように前はオープンに。上の方はボタン、裾はスナップ留めにした。



● 立体感の出る「よりぐけ」

ミシンがけではなく、スカーフの縁のようにまつた丁寧な仕上げ。バイアスでとるので立体感のあるフレアがきれいに出る。



「8年くらい前から、1カ月に1度、洋装店の方や個人でオーダーを請け負っている方々が集まる勉強会に参加しています。福岡の香蘭女子短大の『社会人学び直し講座』に参加して、若いパタンナーの方と一緒に学んだこともあります」

既製服から大いに学ぶことがあるという貫さんは、昔ながらの方法を大切にしつつも、一方で変化に適応できるよう、常にアンテナを張っている。

どこまでも貪欲で、しなやかな貫さんの手から生まれる世界でただ二着の服は、着る人の体だけでなく、心にもぴたりと寄り添ってくれるに違いない。

日々勉強会に参加し
ファッションの変化に適応

ファッションは日々変化している。それはスタイルやデザインだけでなく、新しい素材や道具、テクニックも進化の歩みを止めない。貫さんが長年身を置いているのはそんな厳しい業界なのだ。